

# 摩湯山古墳

—一般府道三林・岡山線歩道設置工事に伴う発掘調査—



1998. 3

大阪府教育委員会



## はしがき

摩湯山古墳は、岸和田市の北部、和泉市との境界付近に立地する大型前方後円墳であります。

古墳は、東南から北西に伸びる丘陵を巧みに利用し、丘陵尾根を切断して墳丘を築造しています。その規模は全長約200m、後円部径約127m、前方部幅約100mをはかる、畿内でも屈指の前期の大型古墳であります。摩湯山古墳は昭和31年5月15日に国史跡として指定された後は、墳丘及び周濠は現在まで保存されてきました。

ただ、古墳の西から北へ抜ける一般府道三林・岡山線は、南側に位置する府道岸和田・牛滝山・貝塚線から泉北ニュータウン方面に通じる泉州山手線へのバイパスとして近年交通量も多く、また古墳周辺は小学校の通学路にもなっていることなどから、道路の拡幅などが地元で切望されておりました。

今回、国史跡の外に位置する摩湯山古墳周濠の北西部に、新しい歩道やバス停留所の建設が大阪府土木部によって計画されました。それに伴い、周堤の北側を発掘調査したところ、上部は削平されていましたが、堤本体の北斜面を長さ約40mにわたって検出し、それに伴い円筒埴輪などの遺物も出土しました。

小規模な調査ではありますが、これら調査の積み重ねが摩湯山古墳の性格を徐々に明確にするものと考えられます。そして、本地域の歴史にとどまらず、日本の古代史を解明していく上でかけがえのない重要な資料になるものと確信できます。

本調査が、関係諸機関及び地元の皆様の多大なる御理解と御協力によって進めることができましたことに、深く感謝の意を表します。今後とも本府文化財保護行政に対して一層の御理解、御協力を賜わりますようお願い申し上げます。

平成10年3月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野一美

## 例 言

1. 本書は、大阪府教育委員会文化財保護課が、大阪府土木部道路課より依頼を受けて平成9年度に実施した岸和田市摩湯町所在、摩湯山古墳の一般府道三林・岡山線歩道設置工事に伴う発掘調査事業の報告書である。
2. 調査は、大阪府教育委員会文化財保護課技師 上林史郎を担当者として実施し、平成9年8月1日に着手し、平成10年3月31日に終了した。
3. 調査の実施にあたっては、大阪府岸和田土木事務所、岸和田市、岸和田市教育委員会、大阪府立泉大津高校の他、地元関係者の方々から多大な協力と援助を受けた。記して感謝の意を表したい。
4. 本書で使用した標高は、すべてT.P.（東京湾標準潮位）表示値である。
5. 本書の執筆については、主として上林がおこない、遺物の一部については技師 西川寿勝があたった。また、編集その他については、上林があたったが、技師 地村邦夫の助力があった。

# 目 次

はしがき

例 言

## 本 文 目 次

第1章 調査にいたる経過.....	1
第2章 調査の成果.....	3
第1節 はじめ.....	3
第2節 検出された遺構.....	6
第3節 出土遺物.....	10
第3章 まとめ.....	20
付 章 馬子塚古墳出土の遺物.....	21
第1節 はじめ.....	21
第2節 出土遺物.....	22

## 挿 図 目 次

fig. 1 岸和田市摩湯山古墳の位置	
fig. 2 摩湯山古墳と調査区位置図 (S=1/5,000)	
fig. 3 遺跡分布図 (S=1/25,000) 國土地理院複製図による	
fig. 4 調査区位置図 (S=1/500)	
fig. 5 調査区遺構配置図及び横断面図(S=1/200及び1/50)	
fig. 6 摩湯山古墳の墳丘測量図 (梅原末治「山直下村摩湯山古墳」 『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告第三輯』を補筆修正し、改変。)	
fig. 7 調査区出土遺物① (S=1/3)	
fig. 8 調査区出土遺物② (S=1/3,1/1)	
fig. 9 調査区出土遺物③ (S=1/3,2/3)	

- fig. 10 調査区出土遺物④ (S=1/3)  
fig. 11 摩湯山古墳埴丘部出土円筒埴輪 (S=1/3)  
fig. 12 摩湯山古墳出土の鱗付円筒埴輪 (S=1/3)  
fig. 13 摩湯山古墳出土の形象埴輪片 (S=1/3)  
fig. 14 馬子塚古墳出土斜縁二神二獸鏡復元図 (S=1/1)  
fig. 15 馬子塚古墳出土斜縁二神二獸鏡及び管玉実測図 (S=1/1)  
fig. 16 馬子塚古墳出土埴輪① (S=1/3)  
fig. 17 馬子塚古墳出土埴輪② (S=1/3)  
fig. 18 馬子塚古墳出土埴輪③ (S=1/3)  
fig. 19 馬子塚古墳出土埴輪④ (S=1/3)  
fig. 20 馬子塚古墳出土埴輪⑤ (S=1/3)  
fig. 21 馬子塚古墳出土埴輪⑥ (S=1/3)

## 写 真 目 次

- 摩湯山古墳周辺垂直写真（左下が北）  
P L. 1 摩湯山古墳と調査区  
P L. 2 摩湯山古墳と調査区  
　　摩湯山古墳前方部（北東から）・調査区（北から）  
P L. 3 調査区  
　　断面B（北西から）・断面A（北西から）・井戸（北から）  
P L. 4 遺物 1  
P L. 5 遺物 2  
P L. 6 遺物 3  
　　摩湯山古墳出土円筒埴輪・細部  
P L. 7 遺物 4  
　　馬子塚古墳出土斜縁二神二獸鏡・断面・東王父  
P L. 8 遺物 5  
　　馬子塚古墳出土管玉・形象埴輪  
P L. 9 遺物 6  
　　馬子塚古墳出土形象埴輪  
P L. 10 遺物 7  
　　馬子塚古墳出土円筒埴輪

# 摩湯山古墳

—般府道三林・岡山線歩道設置工事に伴う発掘調査—

上林史郎・地村邦夫・西川寿勝

## 第1章 調査にいたる経過 (fig. 1, 2)

大阪府岸和田市は、大阪市内から南へ約30km、関西国際空港から約15kmのところにあり、大阪市と和歌山市のほぼ中間に位置する。また、和泉地方の中央部に位置し、市域は東西約7.5km、南北約17.3kmの細長い地形を呈し、その面積は約71.04km<sup>2</sup>をはかる。西は大阪湾に臨み、西南部は貝塚市、北部は泉州郡忠岡町、東部は和泉市、南部は和泉山脈を介して和泉山県那賀郡那賀町や同伊都郡かつらぎ町に接している。人口は約199,900人をはかり、泉南地域最大の都市である。また、近年ではだんじり祭りのテレビ中継や岸和田城の存在によって、全国的にもよく知られている都市でもある。

さて、摩湯山古墳は、岸和田市の北部、和泉市との境界付近に立地する全長約200mの前期大型前方後円墳である。同古墳は、昭和31年に国史跡として指定された後は、墳丘及び周濠は現在まで保存してきた。ただ、本古墳の西から北へ抜ける府道三林・岡山線は、南側に位置する府道岸和田・牛滝山・貝塚線から泉州北ニュータウン方面に通じる泉州山手線へのバイパスとして近年交通量も多く、また古墳周辺は地元城東小学校の通学路にもなっていることから、本府道の拡幅が地元では切望されていた。今回、古墳周堤部にあたる府道を拡幅し、新しい歩道やバス停留所を設置することが大阪府土木部道路課によって計画された。それに伴い、試掘調査を実施したところ、上部は削平されていたが、堤本体の北斜面部分を検出した。そのため、長さ約40m幅約6mの調査区を新たに設定して、発掘調査を進めることとなった。なお、本調査の実施及び本書の作成にあたっては、出合明、八柄あさ代、北村美紀、浅井絹江、納谷有香子、河本直子、古下佳代子、上原香里、大河原睦、道下司、川原清晃、大洞真白の援助をうけた。また、一瀬和夫、近藤利由、芝野圭之助、竹内博之、虎間秀喜、森村健一、山本彰の諸氏からは教示、協力をうけた。記して感謝する。

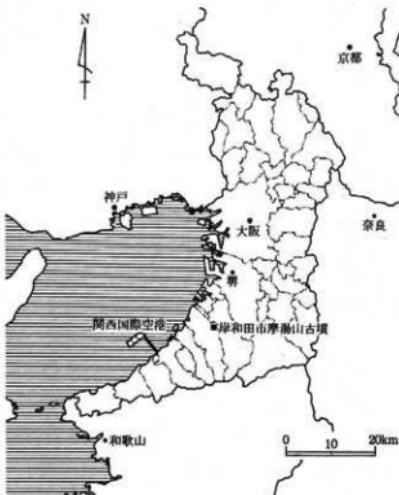


fig. 1 岸和田市摩湯山古墳の位置



fig. 2 摩湯山古墳と調査区位置図 (S=1/5,000)

## 第2章 調査の成果 (fig. 3 ~13)

### 第1節 はじめに (fig. 2, 3, 6)

摩湯山古墳の墳丘及び周濠は、昭和31年5月15日に国史跡に指定された。しかし、古墳に近接する東南部の丘陵全体が、現在大規模団地に変貌し、周辺の地形は一変している。また、本古墳は国史跡であるため、墳丘内への立ち入り調査はできない現状であり、墳丘自体も鬱蒼とした樹木が繁茂し、墳丘測量も容易にはできない。ただ唯一、昭和7年に刊行された梅原末治氏の詳細な報告『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告』第三輯が参考になる。梅原氏の報告を参考にしながら論を進めることにする。(fig. 6)

本古墳は、摩湯町の集落の西南に接している。西北流する牛滝川と松尾川とを限る東南方向から伸びてくる丘陵の西北端に位置し、前面に広がる平野を一望することができる。本古墳は、前方部の正面を西北に向け、墳丘主軸は東南から西北に向かっている。墳丘の周囲には、長池(ミササキ池)、懇願寺池、ニゴリ池、牛瀧池などがめぐっている。また、後円部の背後は丘陵を切断して大規模な掘割りを構築している。いわゆる典型的な丘尾切断の前方後円墳である。同様な墳丘構築技術は、奈良市の神功皇后陵古墳(五社神古墳)や天理市の崇神天皇陵古墳(行燈山古墳)などと共通している。本古墳の墳丘は半ば丘陵地形を利用して造られているため古墳の北西部付近は地形が急激に降下している。長軸の両側のくびれ部には造り出しが認められるらしい。

古墳の規模は、全長約200m、後円部径約127m、前方部幅約100mをはかり、前方部が長い割合に開きの大きくない形式に属する。いわゆる柄鏡式の墳丘形態であろう。なお、前方部で確認できる周濠の幅は約36mをはかる。墳丘の表面には、化粧石として径18cm前後の河原石を二重三重に葺いているという。薄手で焼成堅緻な円筒埴輪(径約33cm)の列が、6~18cm間隔で後円部から前方部にかけての頂上平坦面に樹立され、変則的な造り出し部にも樹立されているという。おそらく、円筒埴輪列は上部ではほとんど密接して樹立されていたものであろう。

かつて本調査区の反対側の堤を横断する水路の工事立会中、底面部分のみが遺存した円筒埴輪列の一部が検出されたらしいが、詳細はわからない(岸和田市教育委員会が立会調査)。

さらに昭和47年頃、国史跡から洩れた後円部北東麓の宅地造成現場から円筒埴輪片が散乱した状況で採集されている。この位置は、丘尾を切断した掘割りの外側に接する場所であるが、後円部の背後の周濠外側と考えられる位置にも円筒埴輪列がめぐっていたのであろうか。

陪塚的なものとして、馬子塚とイナリ古墳の他にメグ谷というところに狐塚と呼ばれるものがあったらしい。また、摩湯山古墳のすぐ東側にある式内社淡路神社の境内からも円筒埴輪片が出土し、社殿のあたりが古墳であった可能性が高いといふ。なお、摩湯山古墳周辺の歴史的環境についてはここでは詳述しない。摩湯山古墳周辺の調査成果については、昭和54年に刊行された石部正志『岸和田市史』第1巻自然・考古編、平成8年に刊行された石部正志『岸和田市史』第2巻古代・中世編に詳しくまとめられているので、参照されたい。(fig. 2, 3)



1. 摩羅山古墳  
2. イナリ古墳  
3. 馬子塚古墳  
4. 観音寺山遺跡（消滅）  
5. 観音寺山遺跡  
6. 観音寺  
7. 観音寺跡  
8. 狐塚古墳  
9. 寺門古墳・古墓  
10. 和泉寺跡  
11. 和泉寺跡  
12. 高月寺跡  
13. 夜鹿寺跡  
14. 同山區古墳  
15. 丹生山古墳群  
16. 軒原池西遺跡  
17. 軒原池  
18. 今木遺跡  
19. 今木寺  
20. 西大村遺跡  
21. 犬土遺跡  
22. 大曾根高寺  
23. 下船遺跡  
24. 山内遺跡  
25. 山北遺跡  
26. 三田遺跡  
27. 上ノジ遺跡  
28. 三池北遺跡  
29. 水石遺跡  
30. 黒石遺跡  
31. 山中遺跡  
32. 和泉丘陵A7地点遺跡  
33. 和泉丘陵A1地点遺跡  
34. 和泉丘陵A8地点遺跡  
35. 和泉丘陵A10地点遺跡  
36. マイ山古墳  
37. 和泉丘陵A15地点遺跡  
38. 和泉丘陵A17地点遺跡  
39. 和泉丘陵A20地点遺跡  
40. 和泉丘陵B2号墳  
41. 貝山遺跡  
42. 三田古墳  
43. 嵩山古墳  
44. 丸山古墳  
45. 大曾根遺跡  
46. 八木古墳  
47. 小坂山高寺  
48. 大曾根  
49. 田鶴羽遺跡  
50. 地尻古墳  
51. 今木古墳  
52. 田治木宮内遺跡  
53. 田治木大寺  
54. 西教寺のいちょう  
55. 古墳出土地  
56. 板屋遺跡  
57. 同岡城跡  
58. 松尾池尾根輪廻路  
59. 馬子古墳  
60. 小金井古墳  
61. 重の山遺跡  
62. 重の山古墳群  
63. 棚本山社古墳  
64. 高山古墳  
65. 三田墓地  
66. どぞく遺跡  
67. 石塚古墳  
68. お立翁古墳  
69. 畠谷古墳  
70. 赤山古墳群  
71. 赤尻町遺跡  
72. 久米田寺跡  
73. 貝吹山古墳  
74. 志内佐佐野御塚古墳  
75. 長板古墳  
76. 丹南古墳出土地  
77. 特ノ木古墳  
78. 無名古墳  
79. 畠次山古墳  
80. 文那古墳  
81. 久米田古墳群  
82. 久米田池  
83. 久米田池遺跡  
84. 久米田池内須恵窯跡  
85. 真壁遺跡  
86. 斎倉遺跡  
87. 竹松遺跡  
88. 斎山遺跡  
89. 筱山遺跡  
90. 丹波山遺跡  
91. 上松原塚古墳  
92. 畠子遺跡

fig. 3 遺跡分布図 (S=1/25,000) 国土地理院複製図による

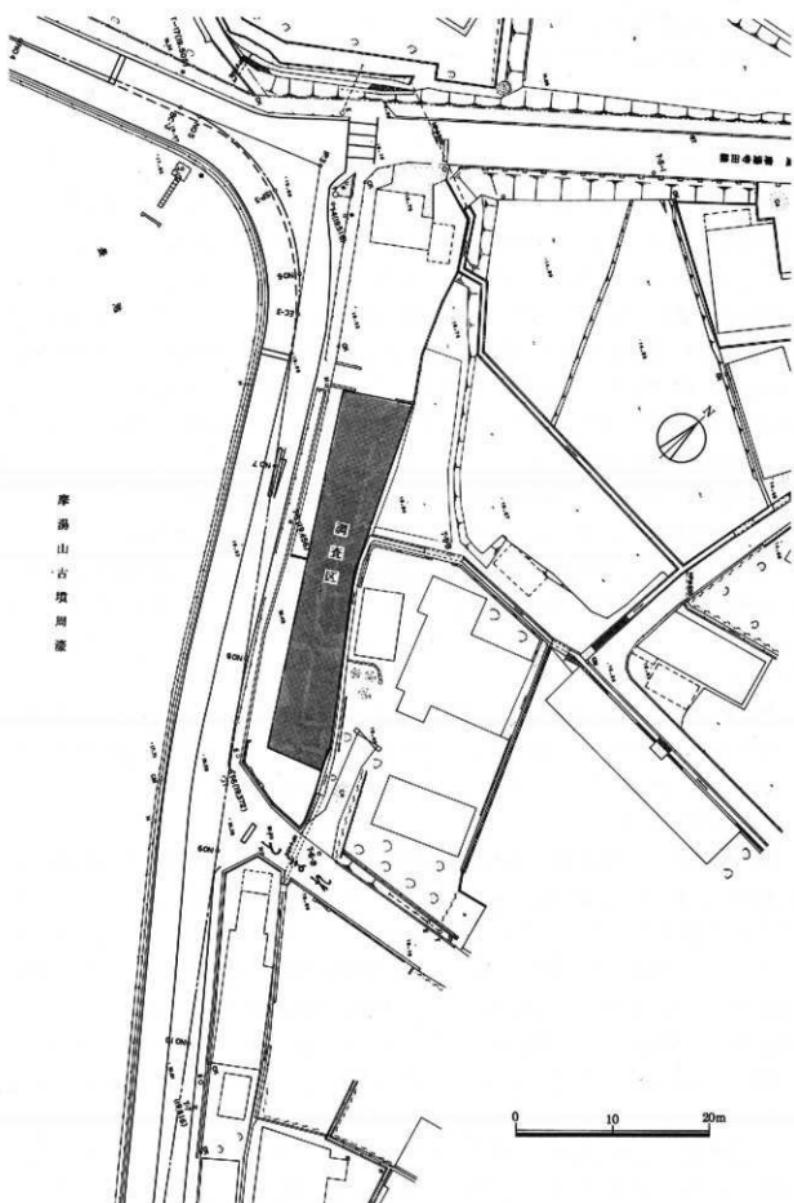


fig. 4 調査区位置図 ( $S=1/500$ )

## 第2節 検出された遺構 (fig. 4～6)

今年度の調査で検出された遺構には、摩湯山古墳の周堤の一部、近世の井戸及び水路がある。なお、調査区の上面は以前立地していた家の廃材などを埋め戻していたため、攪乱が激しい。

### 1. 周堤 (fig. 4・5)

摩湯山古墳の前方部側の周堤は、現在の府道三林・岡山線と重なっているものと考えられ、堤本体の盛土や埴輪列などは検出されなかった。ただ、赤褐色の地山を削りだした堤の北斜面の一部を検出すことができた。検出された堤の規模は、長さ約38.4m、斜面幅1～1.5m、高さ約0.6mをはかる。堤外側のテラス部分の幅は、北東側に堤と平行する近世水路が有るため、幅1.2～4.1mしか遺存していない。また、堤斜面の検出面の高さはT.P.+17.5m前後をはかるが、現在の府道三林・岡山線の道路面の高さがT.P.+19.5m前後とすれば、約2mのレベル差がある。すなわち、調査区付近では、道路擁壁や以前建っていた家の攪乱によって約2mが削平されていることになる。また、堤下部は地山を削り出したものであったが、その斜面の勾配はやや緩やかで、約30度の角度で堤上部へ上がっていく。

堤斜面の埋土は、上から①黄褐色砂質土（0.1～0.25m）、②黄褐色砂質シルト（0.2～0.3m）③暗灰黄色砂質シルト（約0.15m）となり、各層には小片ではあるが、土器が包含されている。ただ、最下層である③暗灰黄色砂質シルトは、比較的均質に堆積しており、堤崩落時の堆積土である可能性が高い。明確な時期を提示しえないが、土器片の観察からいえば平安時代頃であろうか。

### 2. 井戸 (fig. 5)

調査区のやや北寄りで検出された、素掘りの円形井戸と考えられる。規模は径約1.1m、深さ約2.5mをはかる。ほぼ垂直に穿たれ、断面形態は筒状を呈する。埋土は一気に埋め戻したような攪乱ぼい土ではあるが、近世瓦が数片出土している。18世紀頃であろう。

### 3. 近世水路 (fig. 5)

調査区北東部で、道路に平行する形で検出された、近世の水路である。規模は長さ約39m、幅2.2m以上、深さ0.7～1.2mをはかる。底面は、東南から北西に向かって徐々に傾斜し、若干蛇行しながら真直ぐ伸びている。また、水路の東南端付近では、直交する形で小規模な水路が穿たれている。その規模は長さ約3.6m、幅約2.4m、深さ約0.6mをはかる。おそらく、この水路は周堤の上部より掘り込まれたものと考えられる。断面は、水路を横断する10m間隔のあぜを三ヶ所設定した。A断面では、上部がかなり攪乱されており、④灰色砂が約0.2m堆積しているだけである。B断面では、上から⑥黄色ブロックが厚さ約0.25m、⑦黒灰色砂が厚さ約0.35mにわたって堆積していた。C断面では、上部が攪乱されているが、その下は⑥黄色ブロック、⑧灰白色細砂、⑨黄灰色砂、⑩黒灰色砂などが堆積している。各層より比較的まとまって近世の遺物が出土している。それらには、培焰、瓦（鬼瓦・軒丸瓦・丸瓦）、寛永通寶、七厘、火鉢、十能、土人形、土師器小皿、摺鉢などがある。

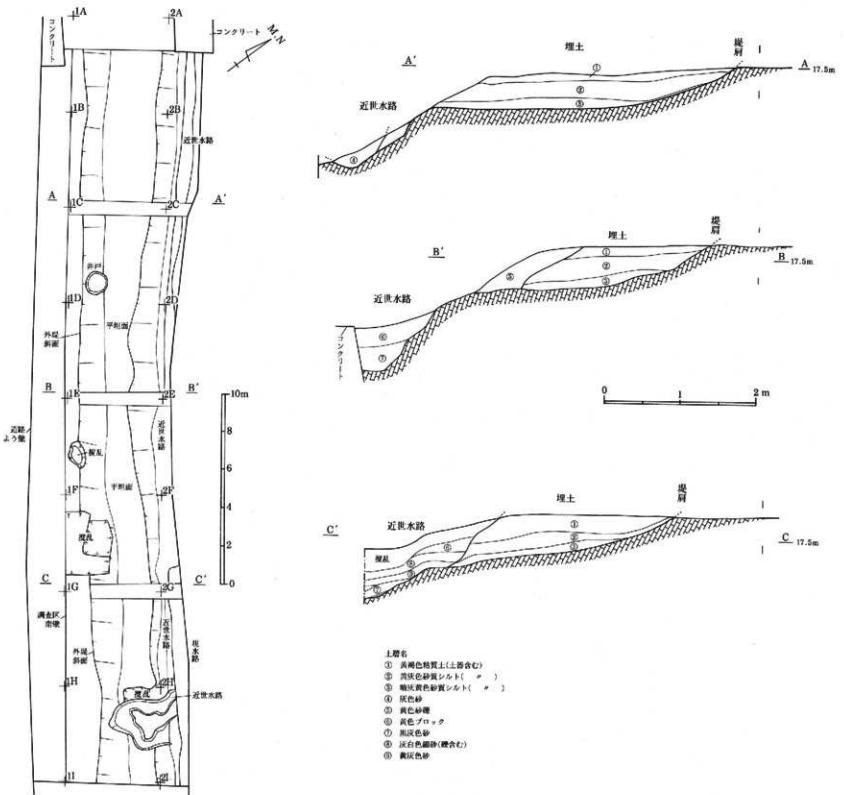


fig. 5 調査区造構配置図及び横断面図 (S=1/200及び1/50)

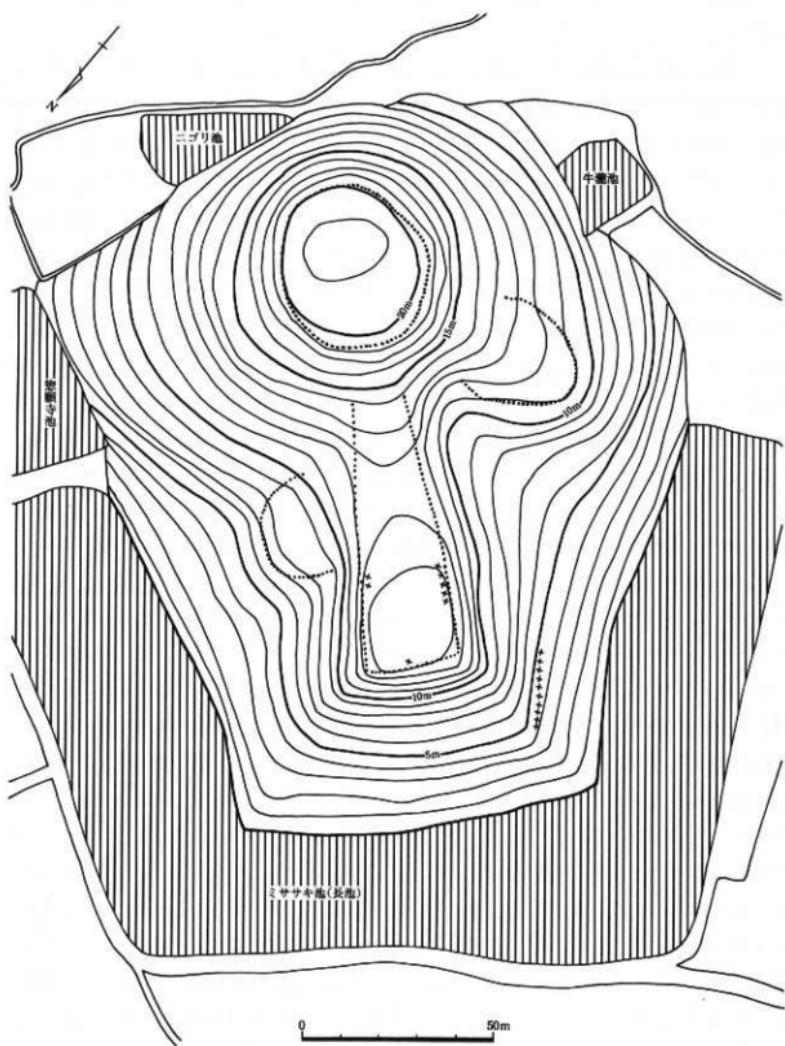


fig. 6 摩湯山古墳の墳丘測量図（梅原末治「山底下村摩湯山古墳」『大阪府史跡名勝天然記念物調査報告第3報』を補筆修正し、改変。）

### 第3節 出土遺物 (fig. 7 ~13)

今年度の調査で出土した遺物には、弥生土器（高杯・壺）、土師器（甕）、円筒埴輪、近世に属する培焰、瓦（鬼瓦・軒丸瓦・丸瓦）、寛永通寶、七厘、火鉢、十能、土人形、土師器小皿、摺鉢などがある。

1～3は、弥生時代後期の高杯脚柱部の破片である。外面は縦方向のヘラミガキ。内面にはシボリ目が遺存している。1の高杯は杯部と脚部の接合に円板を充填した痕跡がある。4～8も弥生時代後期の壺及び甕底部の破片である。器表はかなり摩滅しているが、一部調整が遺存している。4は底部外面の一部に左下がりのタタキ調整がある。5の底部にはドーナツ状圧痕が遺存している。6は底部外面の一部に左下がりのタタキ調整があり、底部にはドーナツ状圧痕が遺存している。さらに黒斑が一部みられる。7は器表の摩滅が著しいが、内面はナデ調整。壺の底部の可能性が高い。8の器表はかなり摩滅しており、調整は明確ではない。ただ底部付近にはユビオサエの痕跡がみられる。9は弥生時代後期の広口壺の口縁部片で、復元口径約17cmをはかる。口縁部はくの字状に外反し、端部を丸くおさめる。また、口縁端部内面には波状紋を展開している。器表はかなり摩滅しているため調整は明確ではないが、外面の一部に縦方向のヘラミガキの痕跡がみられる。色調は淡黄色を呈している。10は庄内式土器の甕の口縁部の破片である。復元口径約15cm、同類部径約11.2cmをはかる。口縁部はくの字状に外反し、端部は尖り気味。調整は口縁部内外面がヨコナデ、体部内面は丁寧なヘラケズリを施し、器肉を薄く仕上げている。1mm以下の砂粒を多く含み焼成は良好である。色調は黄橙色を呈している。11～16は培焰の破片である。11は瓦質培焰の口縁部片で、復元口径約37.0cmをはかる。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部は面をもつ。体部の器肉は約2mmとうすい。口縁部内外面は回転ナデ調整。胎土は精緻で金雲母を多く含み、焼成も良好である。また口縁部内外面には煤が付着している。12は土師器培焰の破片で、復元口径約32.4cmをはかる。口縁部は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。また、口縁部を一部三角形状に引っ張りだして縦方向に円孔を穿っている。口縁部内外面は回転ナデ、体部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。口縁部外面と体部内面には煤が付着している。13も同様に土師器培焰の破片で、復元口径約32cmをはかる。口縁部は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。また、口縁部を一部三角形状に引っ張りだして縦方向に円孔を穿つが貫通していない。口縁部内外面は回転ナデ調整、体部外面は回転ヘラケズリの後ナデ。口縁部外面には煤が付着している。胎土は精良で焼成も良好である。14も同様に土師器培焰の破片である。復元口径約31.1cm。口縁部は垂直に立ち上がり、端部を丸くおさめる。口縁端部内面は肥厚している。また、口縁部を一部三角形状に引っ張りだして縦方向に円孔を穿っている。口縁部内外面は回転ナデ、体部外面は鋭い回転ヘラケズリによって口縁部と画している。外面全体と体部内面には煤が付着している。15も土師器培焰の破片で、復元口径約26.6cmをはかる。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を三角形状におさめる。口縁部内外面は回転ナデ、体部外面は強い回転ヘラケズリを施す。外面全体には煤が付着している。16も土師器培焰の破片で、復元口径約23.2cmをはかる。口縁部は

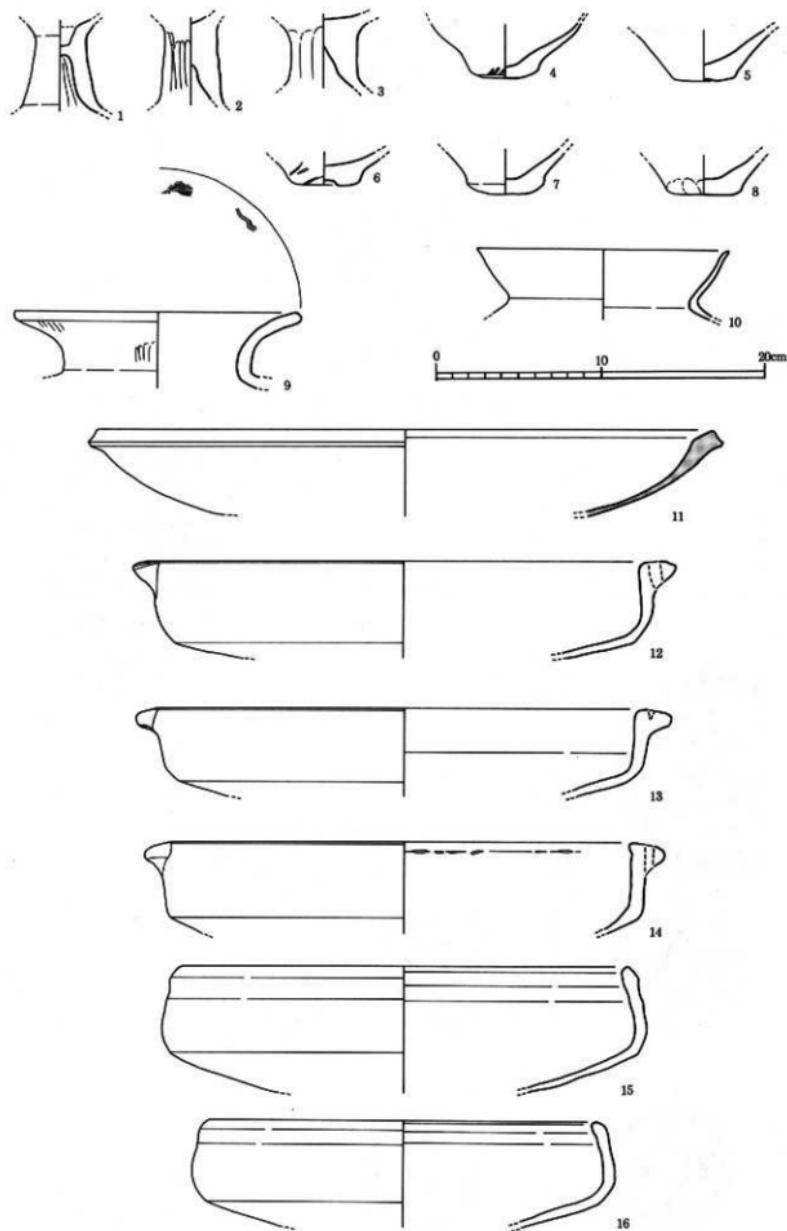


fig. 7 調査区出土遺物① (S=1/3)

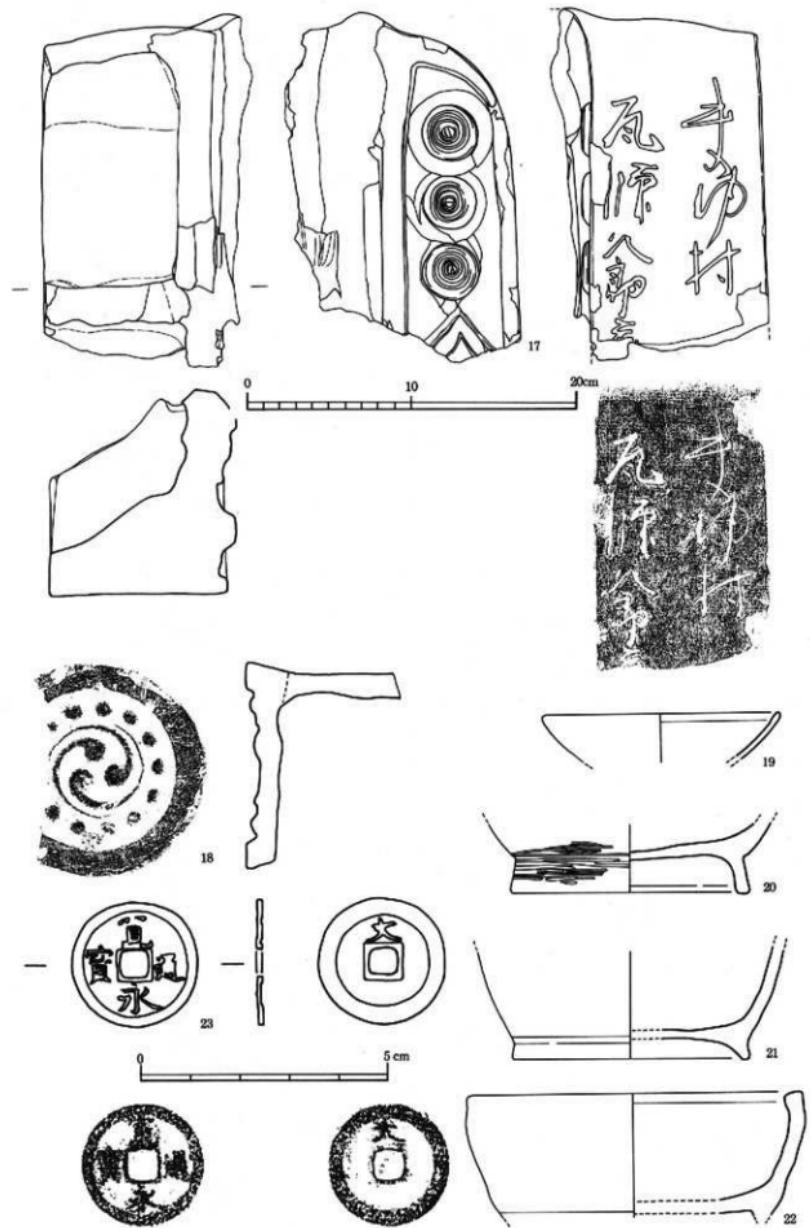


fig. 8 調査区出土遺物② (S=1/3, 1/1)

内湾気味に立ち上がり、端部を三角形状におさめる。口縁部内外面は回転ナデにより凹んでいる。体部外面は強い回転ヘラケズリの後ナデ。外面全体には煤が付着している。17は鬼瓦の周縁部の破片である。鬼面の部分は欠失していて、左の周縁部しか遺存していない。周縁の左側面には大きく「まゆ村 瓦源八郎……」の箋描きが二行にわたってみられる。また、周縁には大きな珠文が縦に三ヶ所みられる。残存高約21.1cm、残存幅約13.4cm、厚さ約10.3cmをはかる。18は巴紋の軒丸瓦である。残存長約8.8cm、厚さ約1.9cm、瓦当面径約12.2cm、巴径約5.5cm、文様区画径約9.2cm、瓦当厚約1.8cmをはかる。左巻きの三つ巴で、連珠は14個と考えられる。19は陶器の口縁部片である。復元口径は約14cmをはかる。口縁部は外上方に開き、端部を丸くおさめる。口縁部内面以外は釉薬が施されている。20は土師質の火鉢片で、復元高台径約14.4cmをはかる。高台は高く下方に強く踏張り、端部は面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ、内面は回転ナデを施す。体部外面には煤が付着している。21も土師質の火鉢片で、復元高台径約14cmをはかる。高台は外下方に開き、端部は面をもつ。外面は横方向のヘラミガキ、内面は回転ナデを施す。体部外面及び底部内面には煤が付着している。22は瓦質の火鉢片で、口径約20cm、器高約7.5cm、器肉約1cmをはかる。口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は内側に面をもつ。底面には一部三角形状の突起があり、おそらく三足になるものと考えられる。器表は摩滅しているため明確ではないが、内外面ともにナデを施している。23は寛永通寶である。裏面には大と鋲出されている。24はほぼ完形の円柱形をした土師質の七厘である。円筒形の内部施設が合体し風量調節用の窓がつくもので、口径約21.5cm、底径約17.5cm、器高約19.1cmをはかる。風量調整用の窓（風口）は、長さ約13.2cm、幅約6.2cmの規模をはかり、左半分が窓で右側が蓋受けになる。蓋受けの表面は、三行にわたって捺印文字が印されているが、確認できるのは「三河名……」だけである。また底部には持運びのための長半円形の抉りがみられる。胎土には金雲母が多く含まれている。25は炭や灰を持ち運んだり、灰を搔きだすときに使用する土師質の十能で、残存長約17.4cm、同幅約9.5cm、高さ約3.5cmをはかる。皿部の厚みは約0.5cmと極端にうすい。把手部は棒状でナデ及びヨコナデ調整を施す。26は土師質の仏像を模した土人形である。上部を一部欠損しているが、光背を背とし台座の上に座して膝の上に両手を組んでいる仏の人形である。台座には、蓮華の文様の痕跡も遺存しており、高さ約7.2cm、幅約4.6cm、厚さ約2.2cmをはかる。金雲母を多く含み焼成も良好である。27は井戸から出土した玉縁の丸瓦片で、残存長約24cm、幅約12cm、厚さ約1.1cmをはかる。表面はかなり焼けており、内面には布目痕が遺存している。28は土師質小皿の破片で、口径約8cm、底径約4.6cm、器高約1.4cmをはかる。口縁部内外面は回転ナデ、底部は回転糸切り痕が遺存している。また内面全体と口縁端部外面に釉薬が施されている。29～32は備前焼の摺鉢の破片である。29は復元口径約33.8cm、残存器高約10.8cmをはかる。口縁帯を広くとり、摺り目の単位は約12本と考えられる。赤褐色を呈し焼成も良好である。30は復元口径約29.3cm、器高約11.5cm、底径約12cmをはかる。口縁帯を広くとり、摺り目の単位は約10本と考えられる。赤褐色を呈し焼成も良好である。31は復元口径約23.2cm、器高約9.9cm、底径約12cmをはかる、小型の

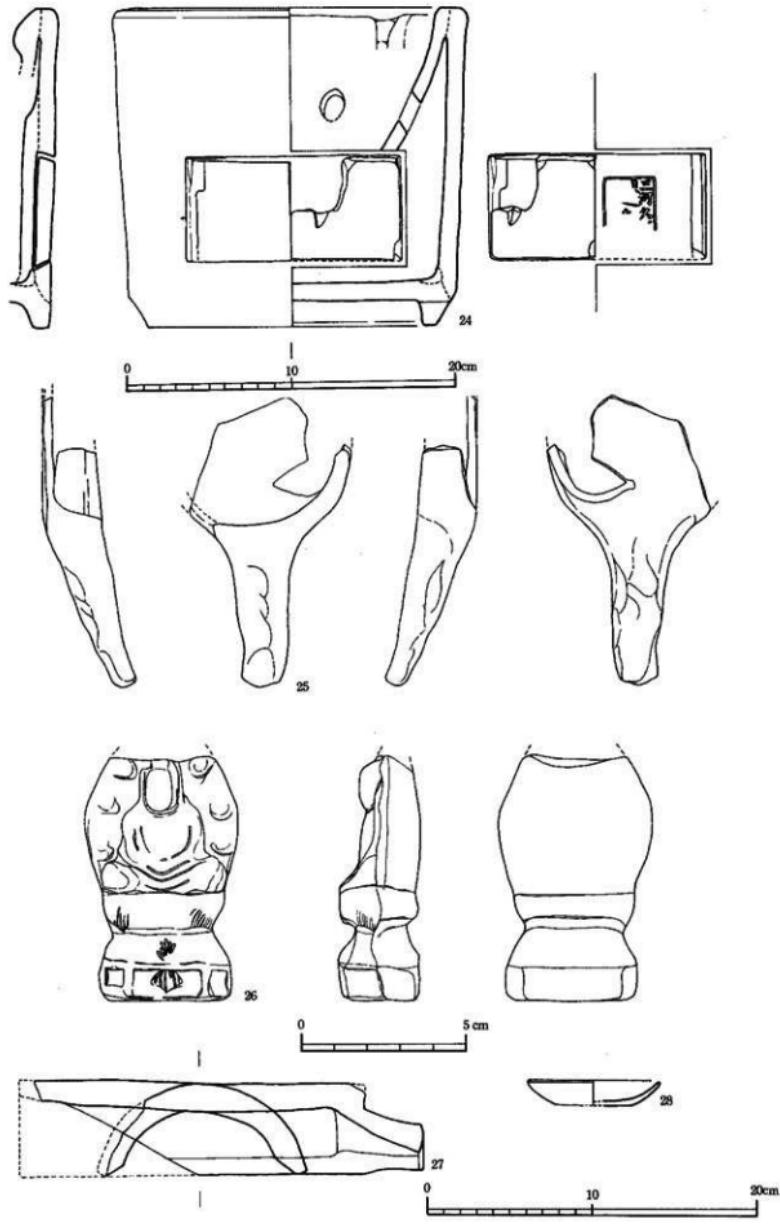
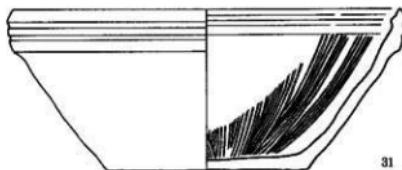
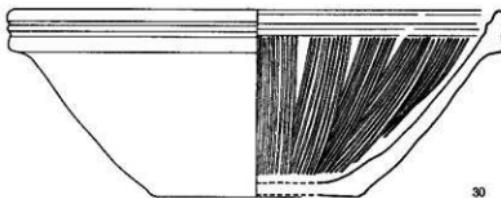
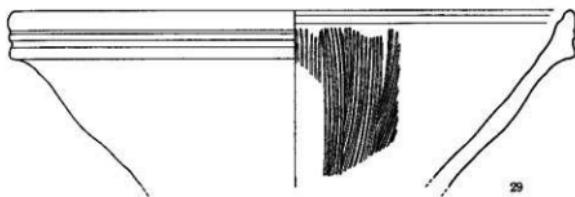


fig. 9 調査区出土遺物③ (S=1/3, 2/3)



0 10 20cm

fig.10 調査区出土遺物④ (S=1/3)

摺鉢である。摺り目の単位は約11本と考えられる。赤褐色を呈し焼成も良好である。32は口縁部を欠失しており、底径は約15cmをはかる。赤褐色を呈し焼成も良好である。調整は回転ナデを施す。なお、近世の出土遺物については、平成4年に刊行された東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会編の『内藤町遺跡－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書一』を参考にした。

33 (fig.11) は、本調査の出土品ではなく、かつて摩湯山古墳の後円部から前方部上段にむかうところで採集された円筒埴輪である（岸和田市教育委員会保管）。この埴輪は、底部から三段目の中ほどまでが良好に遺存しているが、鱗はついていない。全体を五段として復元すれば、70～80cmの高さになろう。現存する埴輪の規模は、底径約29cm、残存高約41cmで、器壁は0.8～1cmとかなりうすい。また、タガの突出高は0.8～0.9cmと以外と小さい。二段目の中央やや上には、長い半円形のスカシを二ヶ所穿っている。スカシの幅は約8cm。調整は、外側が縦方向の丁寧なハケ調整、タガ周辺はヨコナデ調整。内面はナデを施すが、ユビオサエが一部遺存している。胎土は密で2mm以下の黒褐色砂粒を含んでいる。焼成も良好で色調は淡い橙色を呈する。黒斑は外側の各段に認められる。また、調整の残り具合などから、ほぼ一段目全体が埋められていたものと考えられる。34 (fig.12) は、『岸和田市史』第1巻自然・考古編に掲載されていた摩湯山古墳出土の鱗付円筒埴輪の図を拡大して再トレースしたものである。この埴輪は、府立泉大津高校の地盤部生によって1950年代初頭頃に採集されたものである。その所見によれば、「埴丘には三重くらいに埴輪円筒が統いており、現地へ行ってみると、円筒は延々と連なって埋められていますが、隣り合った円筒は、お互いのヒレを重ねています。円筒を置く間隔を正しく保ち、又、一直線にゆがまないようにするためにつけたのでしょうか。」と述べられている。この鱗付円筒埴輪が、埴丘のどの部分から採集されたものかは明確ではないが、摩湯山古墳から出土したことでは確実であろう。『岸和田市史』第1巻自然・考古編から、この埴輪の観察所見を引用すれば、「……埴輪はほぼ完形に復元されており、高さ約71.0cm、復元口径33cm、底径24.2cmをはかる。器壁はうすく、1cm弱に仕上げられている。タガは三本めぐり、下段のタガから上に幅約8.3cmの鱗がつけられているが、鱗が円筒の口縁部まで達していたかどうかは不明である。……器壁は内外面共全面ナデによる二次調整をおこなっており、刷毛目の痕跡はみられない。タテ長の方孔一対が図示の位置にある。」と述べられている。さて筆者もこの鱗付円筒埴輪を実見したのであるが、確かに外面にはハケ目は遺存していないかった。おそらく調整は摩滅しているものと考えられる。ただ、33の円筒埴輪と比較すると、やや小振りの感がある。35～43 (fig.13) も、『岸和田市史』第1巻に掲載されていた摩湯山古墳出土の形象埴輪片の図を拡大して再トレースしたものである。35～38は楕円形埴輪の破片であろう。三角紋や直線紋を基調としたモチーフである。39は鱗付円筒埴輪の一部であろう。鱗の貼り付けをよくするため、縦の刻み目を施している。器壁はやはりうすい。40～42は円筒埴輪片である。タテハケを基調とし、ヨコハケのものもみられる。42は朝顔形円筒埴輪の破片で、タテハケが一部のみとめられる。



fig. 11 摩湯山古墳埴丘部出土円筒埴輪 (S=1/3)

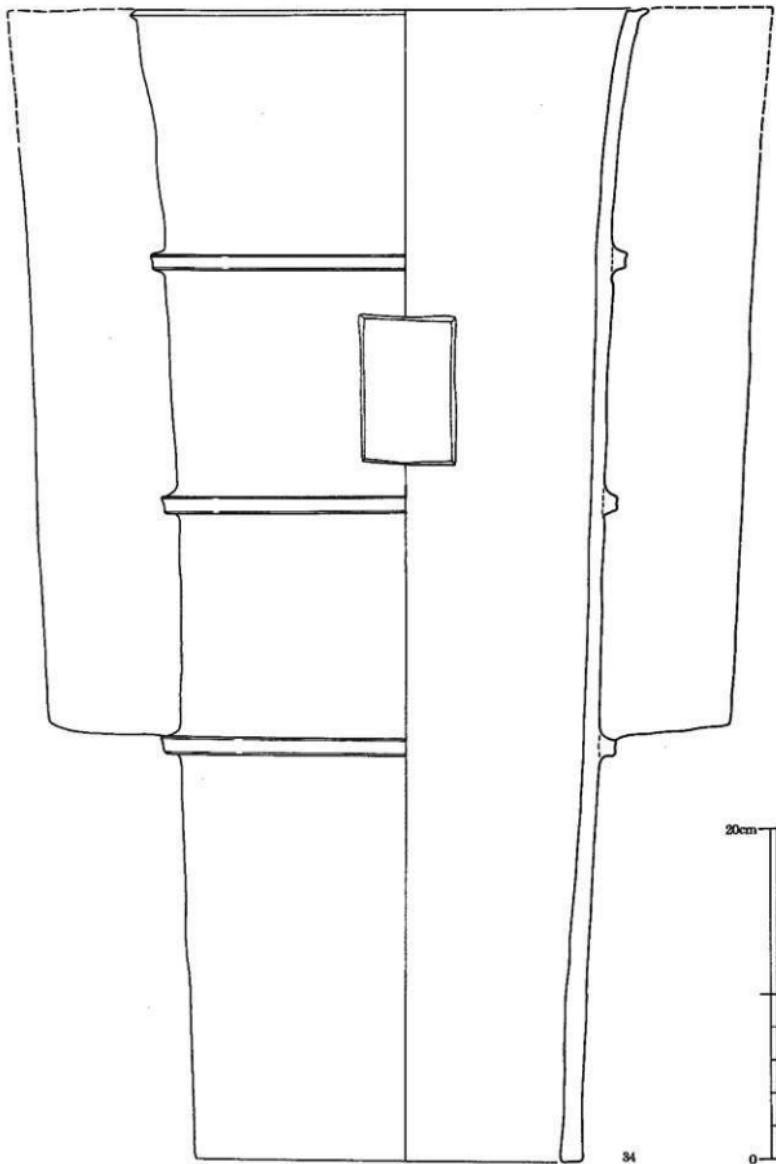
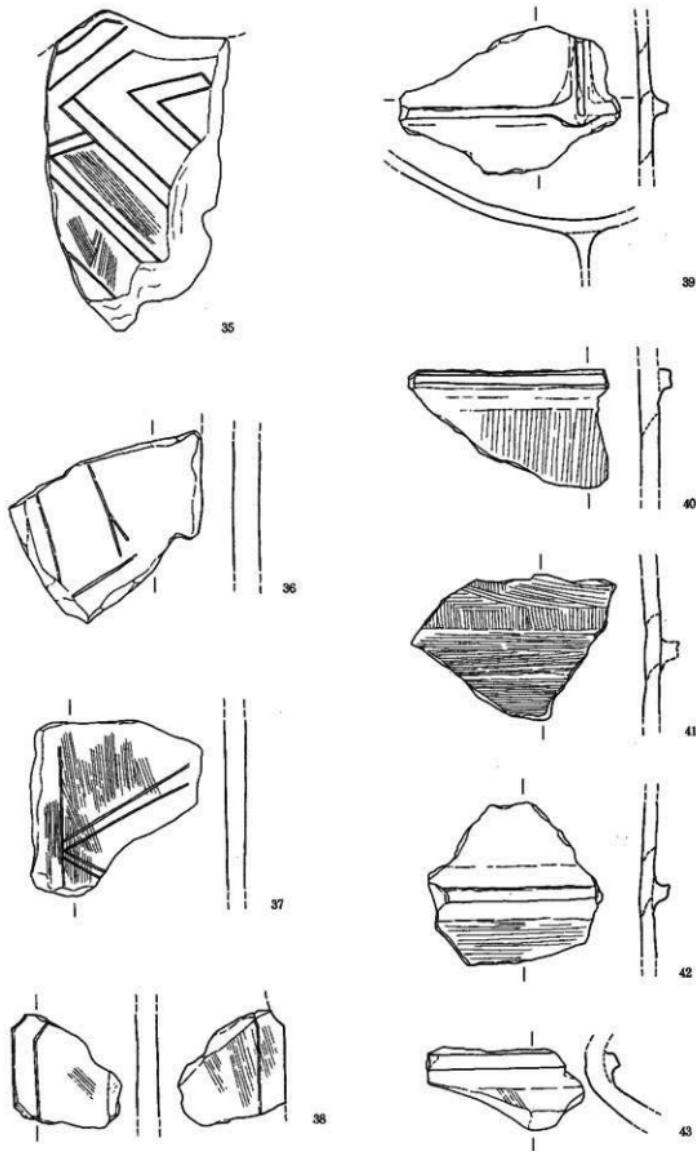


fig. 12 摩湯山古墳出土の鍍付円筒埴輪 (S=1/3)  
(石部正志『岸和田市史』第1巻から、補筆・修正し、改変)



0 20cm

fig. 13 摩湯山古墳出土の形象埴輪片 (S=1/3)  
(石部正志『岸和田市史』第1巻から、補筆・修正し、改変)

### 第3章まとめ

摩湯山古墳は、東南方向から北西にむけて派生する東山丘陵の先端に位置している。本調査で出土した弥生後期の土器片は、摩湯山古墳築造以前の状況を示している。おそらく、弥生後期の集落が丘陵上に展開していたのであろう。同様な状況は、東山丘陵の東南部付近に位置する上フジ遺跡や、和泉市域に入るが、東山丘陵の一本北側の丘陵に位置する、大規模な高地性集落の觀音寺山遺跡、さらに東山丘陵の一本南側の丘陵に立地するどぞく遺跡などの存在からも首肯しうる。これらの弥生後期の高地性集落は、約1km毎に存在し、狼煙などでお互い伝達や連絡を取り合っていたものと考えられる。南河内の寛弘寺遺跡の調査例をとれば、標高80~110mの低平な丘陵上に弥生時代中~後期に属する約150棟の堅穴式住居や建物などが展開しており、まさしく丘陵上の定住が証明された。しかし、古墳時代前期初頭には丘陵上の集落は途絶する。それにかわって、前期末頃新たに小規模な方墳などが出現し、それ以降古墳時代中~終末期にかけて連綿と古墳が営まれる丘陵に変化する。明確ではないが、本調査で出土した弥生土器片は、摩湯山古墳の立地する東山丘陵が弥生から古墳にかけて、寛弘寺丘陵と一部共通していることを示唆している。さて、摩湯山古墳は、墳丘長200mに及ぶ畿内でも屈指の前期大型前方後円墳である。ただ、他の畿内の前期古墳同様、不分明な部分が多い。墳丘測量図は、現在も梅原末治氏が昭和7年に作成した略測図しかなく、周堤も含めた正確な墳丘測量図の作成は必要急務であろう。たとえば、後円部の背後から出土したという埴輪片が墳丘に樹立されていたか、その外側なのかも明確ではない。さらに、正確な墳丘等高線の計測や、梅原氏指摘の変則的な造り出しの確認も重要であろう。次に、円筒埴輪列は三重にめぐっていたという指摘がある。すなわち、後円部上段と前方部上段、前方部下段ということなのであろうか。それらには、器財埴輪や円筒埴輪、鰐付円筒埴輪、朝顔形埴輪などが含まれている。葺石についてもびっしりと密に葺かれていたらしい。また、墳丘くびれ部を結ぶ線上に中堤があるが、これは古墳築造時のものと考えられる。この中堤の存在によって、周濠は階段状になっている。周濠は、前方部側だけみれば馬蹄形を呈しており、その外側にはおそらく周堤がめぐっていたのであろう。埋葬施設についてはよくわからない。後円部中央が広く凹み、石材が散乱しているという。盜掘を蒙っているのであろうか。採集された緑泥片岩の破片によって、堅穴式石室の存在が想定されよう。なお、棺構造や副葬品については全くわからない。さらに、陪塚として5世紀初頭頃に馬子塚古墳が築造されている。

上述した成果を総合すれば、摩湯山古墳は4世紀末葉に築造された和泉地域最古の大型前方後円墳となろう。また、本調査の成果以外に、摩湯山古墳で採集された円筒埴輪や、後述する馬子塚古墳の出土遺物については、和泉地域の古墳研究、ひいては畿内の前期古墳研究の一助になればと掲載、再録したものである。資料は、公表されて初めて生きてくるものであろう。公表されない資料は、死蔵され、朽ち果てていく。これらの資料は、出土してから25~40年経た今日、我々に対して雄弁に問い合わせてくる。

(上林史郎)

## 付章 馬子塚古墳出土の遺物 (fig.14~21)

### 第1節 はじめに

馬子塚古墳は、国史跡である摩湯山古墳の南側周堤部に接するところに位置し、摩湯山古墳の陪塚と考えられている方墳である。現在、馬子塚は墳丘上部が削平され平坦になり、果樹園などに利用されている。馬子塚古墳から出土した遺物の経緯については、森浩一氏や石部正志氏の論考に詳しいので参考にする。それによると、昭和33年11月に摩湯山古墳の前方部正面の長池の堤の補修工事が行なわれた際、それに必要な土砂が馬子塚古墳の墳丘を削平して採取され、墳丘上段部と埋葬施設は損壊されてしまったという。この工事中に後述する斜縁二神二獸鏡1面や管玉15個などの遺物が出土した。ただ、これらの遺物が工事による発見であったため、遺物の正確な出土位置や種類、量などは明確ではない。さらに、出土した遺物の大部分は破棄されたり、故意に破碎されたという。また、最初に遺物を実見した森浩一氏にしても、現地で確認したものではなく、後日地元摩湯町在住の原田利秋氏からの聞き書きや、その後の現地観察によるものである。森浩一氏によれば、本来馬子塚古墳の墳丘は二段築成であったという。しかし、一段目の大部分は自然の隆起と推定され、土取りの対象となった二段目だけが盛土であったという。墳丘は長方形を呈しており、その長辺の方向は長池の周堤線と平行している。墳丘基底部の規模は約35m×30m、高さは約4mをはかる。盛土の二段目の規模は20m×15.5m、高さは現状で約0.7mあり、元来上部にかなり広い平坦面を有していたらしい。

さて、遺物はこの中央部から発見されたという。森浩一氏の記録によれば「断面でみると、20cmの腐植土の下に、厚さ35cmの灰色の良質な粘土が東西2.8mにわたって堆積しており、その下は砂利混じりの土であった。この粘土層が主体設備の端に相当すると考えられる。」として、北東から南西方向に長軸をとる粘土櫛の存在を想定している。また、石部氏によれば「現在の墳丘は、採土後整形されたものであり、そのとき埴輪が出土したという。埴輪は付近の水田にも落ちていたらしく、相当分散して多くの破片が採集できる状態であったようである。しかし、今では玉谷 哲氏が保管してきた若干の資料をみることができるだけである。」と述べている。

以上、森・石部両氏の所見を総合すると以下のようになる。①馬子塚古墳は摩湯山古墳の南側周堤に接して築造された一辺約35mの方墳である。②墳丘は二段築成であり、墳丘上には円筒埴輪などが樹立されていた可能性が高い。③埋葬施設は粘土櫛と考えられるが、木棺の有無はわからない。④埋葬施設から斜縁二神二獸鏡や管玉などの副葬品が出土している。⑤馬子塚古墳の立地や遺物の内容などから、両氏とも摩湯山古墳の陪塚とし、その築造時期も主墳である摩湯山古墳と併行する古墳時代前期後半（4世紀後半）と考えている。

#### 参考文献

- ・森浩一「大阪府岸和田市摩湯町出土の古墳遺物」『古代学研究』第26号、1960.11
- ・森浩一「第三章第一節 古墳の発生と古墳前期の文化」『大阪府史』第1巻古代編1、1978.3
- ・石部正志「第五章第三節 古墳時代」『岸和田市史』第1巻、1979.9

(上林)

## 第2節 出土遺物 (fig.14~21)

馬子塚古墳から出土した遺物には、斜縁二神二獸鏡1面と管玉15個（大阪府教育委員会保管）橋形埴輪などの形象埴輪片や円筒埴輪片がコンテナにして約6箱（岸和田市教育委員会保管）などがある。次に各出土遺物について説明する。

### 1. 馬子塚古墳出土の斜縁二神二獸鏡 (fig.14, 15)

本鏡は、採土工事中に管玉とともに発見されたものである。鏡背の一部には、朱と粘土が付着し、鏡面・鏡背面ともに緑白色の鏽に覆われており、主体部から出土したことが窺える。径は約13.8cm、破損が激しく内区の一部を欠損しているがその割れ口は新しい。完形で副葬されていたものと推定できる。鏽に覆われていない部分は漆黒色、割れ口は銀白色で、銅質はよく舶載の中型鏡としては厚手であることがわかる。

本鏡は、内区に半肉彫りの神像と怪獣を小乳を挟んで交互に二つづつ配置し、外区紋様に鋸齒紋帯と複波紋帯をもち、外縁端部が緩やかにせりあがる斜縁二神二獸鏡である。

内区の外側には銘帯・櫛齒紋帯がある。現在、銘帯と櫛齒紋帯の大部分と内区主紋様の怪獣の一つと神像の一部を欠損する。内区欠損部を下に据えた場合、左側の神像是頭部に渦状の冠を被り、右をむいて座する。これは西王母で左脇に玉女を従える。相対して右側の神像是頭部に三山冠を被り、右をむいて座する。これは東王父である。東王父像の左には仙人を描いていたと予想できるが欠損している。上側の怪獣は口をあけて疾走し、顎・頬から長い鬚を伸ばしている。下側の怪獣は大部分が欠損し、僅かに後足を残すのみである。小乳は頂部が丸く低い。乳座は素円で鉢座と同じである。鉢は半円鉢、紐穴は蒲鉾形で上面がすり減る。銘帯の幅は0.8cmと広い。

しかし、文字は鏽上がりの悪さでほとんど判読できない。わずかに「…………孫子…………」と読めるがつくりの部分は明確ではない。外区は内区と比べ一段厚くなり、外側から鋸齒紋帯・複波紋帯・鋸齒紋帯をそれぞれ緻密に刻み、外縁端部はやや三角形状にせりあがる。この部分も鏽上がりが悪く端部がつぶれている。仕上げの研磨痕跡もみられない。

以上の観察結果から、本鏡は斜縁二神二獸鏡の中でもその特徴をよく備えた鏡であることがいえる。ただ、類例と比較した場合、やや小型で紋様などにいくつかの簡略がみられる。

すなわち、整った構成の鏡では鉢座に有節重弧紋帯を採用する。また、神像は脇侍・羽人を両側に一人づつ配置する。本鏡では、鉢座は素円、脇侍も片側のみと省略がみられる。一方、外区は最も整った形態を示している。省略された複波紋帯は波の幅が広く、空間に珠紋などを配置する。このような紋様をもつ外区の断面は薄く、外縁端部のみ高い三角縁となる。本鏡の複波紋帯は緻密で、外区断面が平縁と同じくらい厚く発達しており古い要素を示す。

因みに、整った銘文は『吾作明鏡 緯縫三商 統德序道 配象萬彌 曾年益寿 子孫蕃昌 楽未央』となる。本鏡の銘帯は、文字間隔が広く、銘文は大幅な省略があったと予想できる。

斜縁二神二獸鏡については、これまでに50面以上の出土が知られている。しかし、中国本土での出土例はほとんどみられない。斜縁二神二獸鏡の出土地は、北朝鮮楽浪郡地域を中心に遼寧省

と日本に限られており、その製作地を限定できる。逆に中国本土では、斜縁二神二獸鏡と構成要素は同じものの、怪獸は龍・虎の區別を明確にし、神像は立像となる神人龍虎画像鏡が広く分布している。しかし、神人龍虎画像鏡は日本からはあまり発見されず、その出自を物語っている。

さて、斜縁二神二獸鏡は、縁の形態や紋様から三角縁神獸鏡との近似性が指摘されている。ただ、この鏡式は、大阪府ヌク谷北古墳など仿製三角縁神獸鏡と共に、小古墳を中心に発見されているため、流通した時期も新しくその扱いについても低く位置付けられている。ところが、愛媛県朝日谷2号墳や大阪府安満宮山古墳などの出現期の古墳からも発見例が増加し、その流通期間を長く考えざるを得なくなった。また、副葬品配列についても、舶載の三角縁神獸鏡の扱いと遜色なく、大王墓と考えられている大阪府津堂城山古墳出土例でも、低く位置付ける必要を否定できる。ただ、流通期間と製作時期は分けて考える必要があるだろう。斜縁二神二獸鏡の多くは

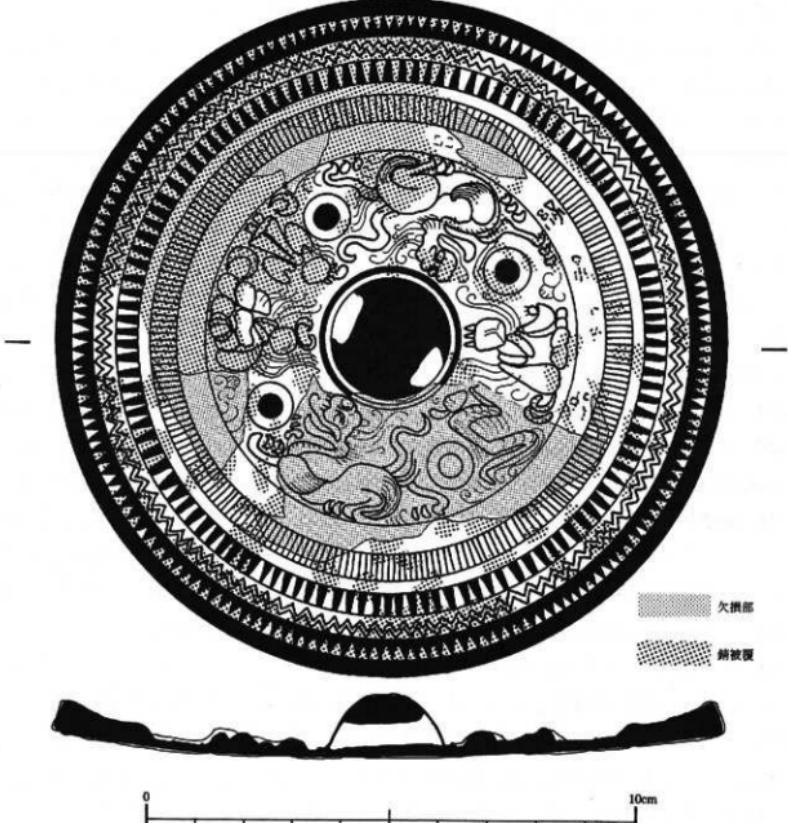


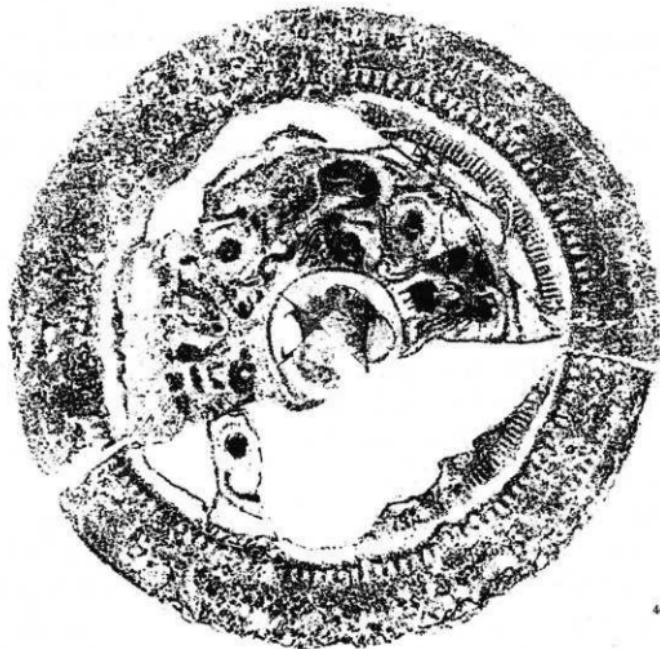
fig. 14 馬子塚古墳出土斜縁二神二獸鏡復元図 (S=1/1)

鉄上がりが頗る悪く、踏み返して量産された可能性がある。本鏡も、形態は古い要素を残す精緻な鏡だが、鉄上がりの悪さや5世紀にかかる小古墳からの発見など鏡の重層性をよく示す好例である。この観点にたてば、滋賀県安土瓢箪山古墳出土例や奈良県佐味田宝塚古墳出土例などの前期古墳から、舶載鏡と混在して仿製斜縁二神二獸鏡が発見されることも示唆的である。これらの仿製鏡が、奈良県大和天神山古墳の副葬品配列と同様に、他の舶載鏡と同列に扱われ、また副葬されている状況は、踏み返しなどの舶載鏡の階層を再構築しなければならない必要性へと導くことだろう。

(西川寿勝)

## 2. 馬子塚古墳出土の管玉 (fig.15)

馬子塚古墳からは、大小合わせて計15個の管玉が出土している。管玉はすべて碧玉製であり、その形態は円柱状を呈している。45は長さ4.0cm。径は上が0.98cm、下は1.0cm。穿孔の径は上が0.35cm、下は0.3cm。両面穿孔。表面は緑色を呈している。上端と下端に小さな凹みがみられる。46は長さ3.8cm。径は上が1.13cm、下が1.14cm。穿孔の径は上が0.27cm、下は0.31cm。両面穿孔。表面は淡緑色を呈している。上端には一部欠損がみられる。47は長さ3.55cm。径は上が0.56cm、下は0.6cm。穿孔の径は上が0.28cm、下は0.2cm。両面穿孔。下端に小さな凹みがみられる。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。48は長さ3.4cm。径は上が0.55cm、下は0.54cm。穿孔の径は上が0.3cm、下は0.24cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。49は長さ3.35cm。径は上が0.85cm、下は0.79cm。穿孔の径は上が0.22cm、下は0.25cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。50は長さ3.32cm。径は上が0.59cm、下は0.6cm。穿孔の径は上が0.22cm、下は0.25cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。51は長さ3.2cm。径は上下とも0.5cm。穿孔の径は上下とも0.22cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。52は長さ3.1cm。径は上が0.5cm、下は0.52cm。穿孔の径は上が0.2cm、下は0.26cm。両面穿孔。表面は淡灰緑色を呈している。53は長さ2.8cm。径は上が0.79cm、下は0.8cm。穿孔の径は上が0.29cm、下は0.2cm。両面穿孔。表面は淡灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。54は長さ2.98cm。径は上が0.73cm、下は0.75cm。穿孔の径は上が0.26cm、下が0.2cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に青緑色の縞模様がみられる。55は長さ3.05cm。径は上下とも0.52cm。穿孔の径は上が0.22cm、下は0.25cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面に縦方向の赤茶色の縞模様がみられる。56は長さ2.8cm。径は上下とも0.5cm。穿孔の径は上が0.23cm、下は0.25cm。両面穿孔。下端に小さな凹みがみられる。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。57は長さ2.7cm。径は上下とも0.5cm。穿孔の径は上が0.2cm、下は0.25cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。58は長さ2.5cm。径は上が0.75cm、下は0.74cm。穿孔の径は上下とも0.24cm。両面穿孔。表面は灰緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様や欠損がみられる。59は長さ2.4cm。径は上が0.78cm、下は0.77cm。穿孔の径は上が0.22cm、下は0.21cm。両面



44

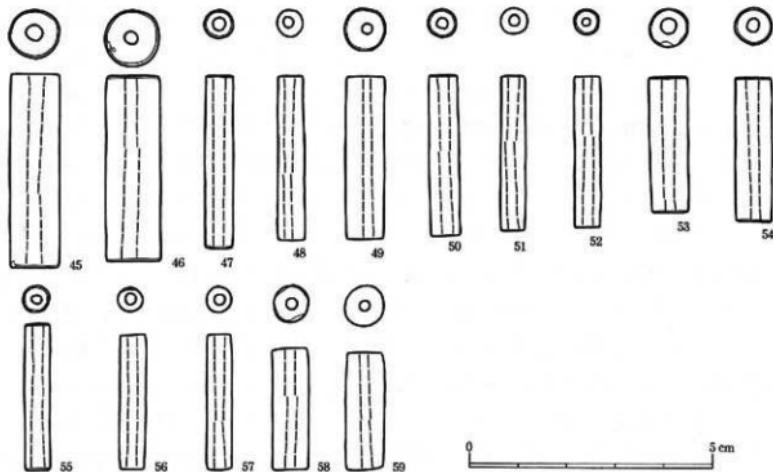


fig. 15 馬子塚古墳出土斜線二神二獸鏡及び管玉実測図 (S=1/1)

穿孔。表面は淡緑色を呈している。円柱部外面には縦方向に赤茶色の縞模様がみられる。以上、15個の管玉の法量や特徴を述べてきた。おそらく、これらの管玉は一連の頸飾りを構成するものであろう。ただ、それらを連結した場合、全長が47cmしかなく、頸にかけるには環が小さすぎる。しかし、前頸部から胸にかけての部分を管玉の連結とし、後頸部を紐だけにすれば、頸飾りとして十分に成立立つ。さらに、管玉45と46が径も長さも大きく、一对になるものと考えられる。同様に47と48、49と50、51と52、53と54、56と57、58と59が一对になるものであろう。なお、55だけが対のものがみあたらぬ。管玉総数が15個という奇数なものおかしい。一部散逸しているのであろうか。さらに、勾玉はなかったのであろうか。何分、40年前の工事中の不時発見なので、いまではわからない。

### 3. 馬子塚古墳出土の埴輪 (fig.16~21)

馬子塚古墳からは、コンテナにして6箱の埴輪が出土している。かなり、細片になっているものも多いが、作図可能なものは図化して以下に掲げた。

主に、形象埴輪と円筒埴輪に大別できる。

#### 形象埴輪

60は鷲形埴輪（椅子形・ついたて形・衣蓋形か）の立ち飾りの下部の破片と考えられる。残存長27.5cm、同幅14.5cm、厚さ約1.35cmをはかる。両面に幅0.1cmの線刻がみられる。外縁に沿って一本、その内側にはほぼ平行する二本の沈線がある。調整は横方向のハケの後に、縦方向のハケを施している。両面には色鮮やかな朱が塗布され、沈線にまで朱が染み込んでいる。色調は黄橙色を呈し、焼成も良好である。片面には黒斑が遺存している。61は衣蓋形埴輪の立ち飾り部の破片である。残存長22cm、同幅13cm、厚さ1.35~1.9cmをはかる。両面に幅0.1cmの線刻がみられる。長方形の枠に二重の鋸歯紋を二段にわたって表現し、その外側には二本の平行する沈線を交差させている。調整は、縦方向の荒いハケを施している。また、外縁部にはユビオサエや粘土の離目がみられる。両面には色鮮やかな朱が塗布され、沈線にまで朱が染み込んでいる。色調は黄灰色を呈し、焼成も良好である。62は、調整や形態などから61と同一個体と考えられる。残存長12.9cm、同幅11.7cm、厚さ約1.2cmをはかる。中央に二本の直線を施し、両側に斜め方向のやや細い二本の直線紋を刻んでいる。調整は、縦方向の荒いハケを施している。片面にはよく朱が遺り、逆面には黒斑が遺存している。63は楯形埴輪の一部と考えられる。三つの破片が接合された。残存長21.5cm、同幅18cm、厚さ1.3~2.5cmをはかる。線刻は片面しかみられない。線刻面は、幅2~2.5cm間隔で平行する二本の沈線で画された幅10cmの横帯に三重の線鋸歯紋を交互に配する構図である。鋸歯紋帶の間には、長三角のスカシを穿っている。また、下方には本体と剥がれた接合面が看取しうる。調整は、両面とも荒い縦方向のハケを施している。朱の塗布はみられない。64は、調整や形態などから63と同一個体と考えられる。残存長11.5cm、同幅7.2cm、厚さ1.4~2.5cmをはかる。線刻は片面のみである。直角に交差する一本の沈線が表現され、幅3cmの凸帯の剥がれた痕跡がみられる。また、上方は本体と剥がれた接合面が看取できる。調整は、両面と

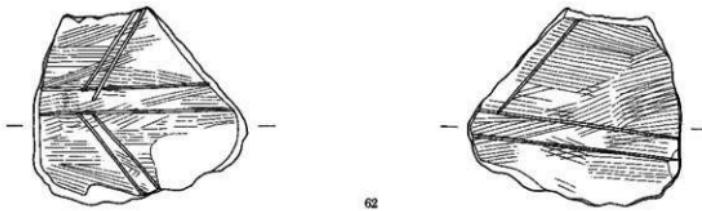
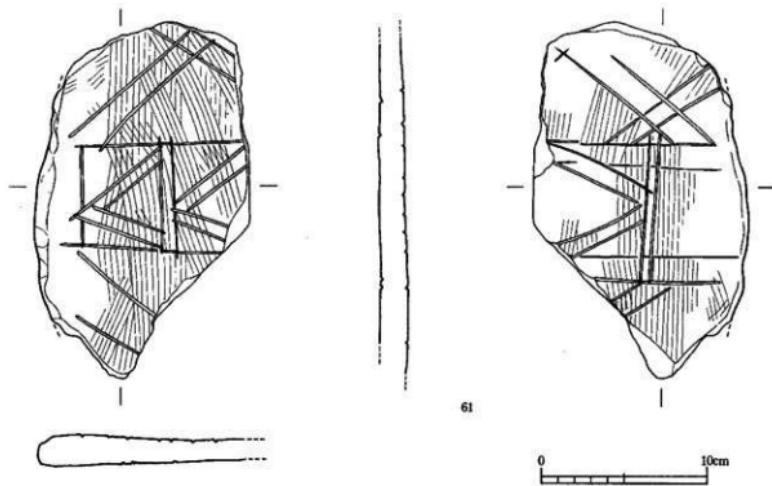
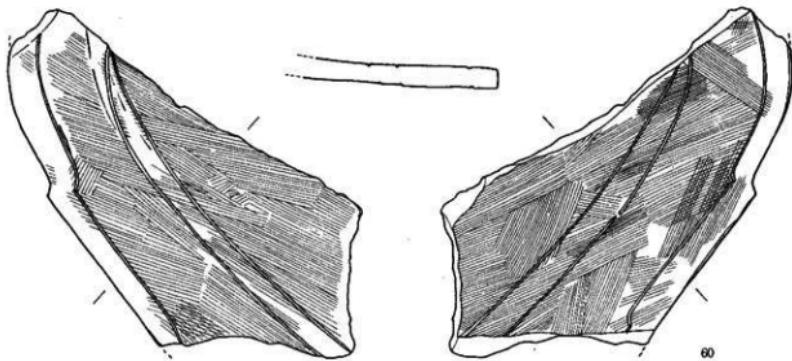
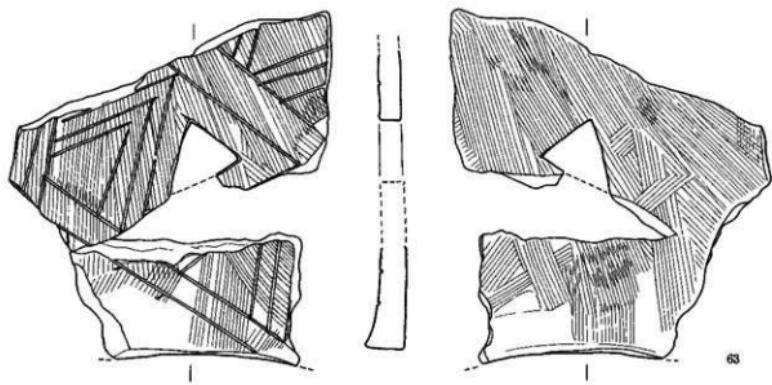


fig. 16 馬子塚古墳出土埴輪① ( $S=1/3$ )



0 10cm

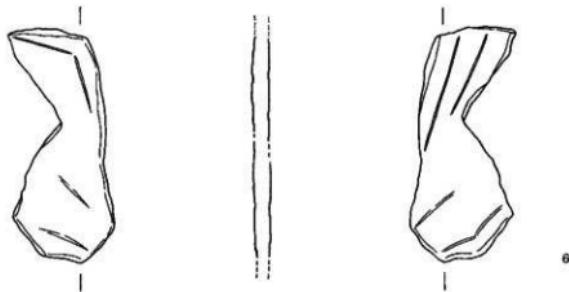
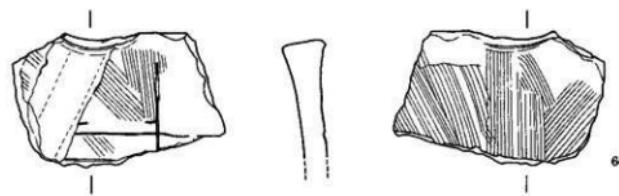
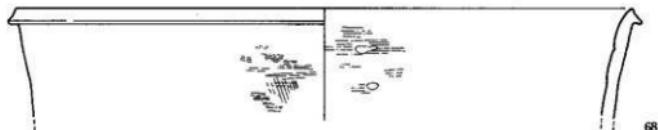


fig. 17 馬子塚古墳出土埴輪② (S=1/3)



67



68



69

70



71

75



72

76



73

77



74

78

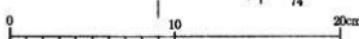


fig. 18 馬子塚古墳出土埴輪③ (S=1/3)

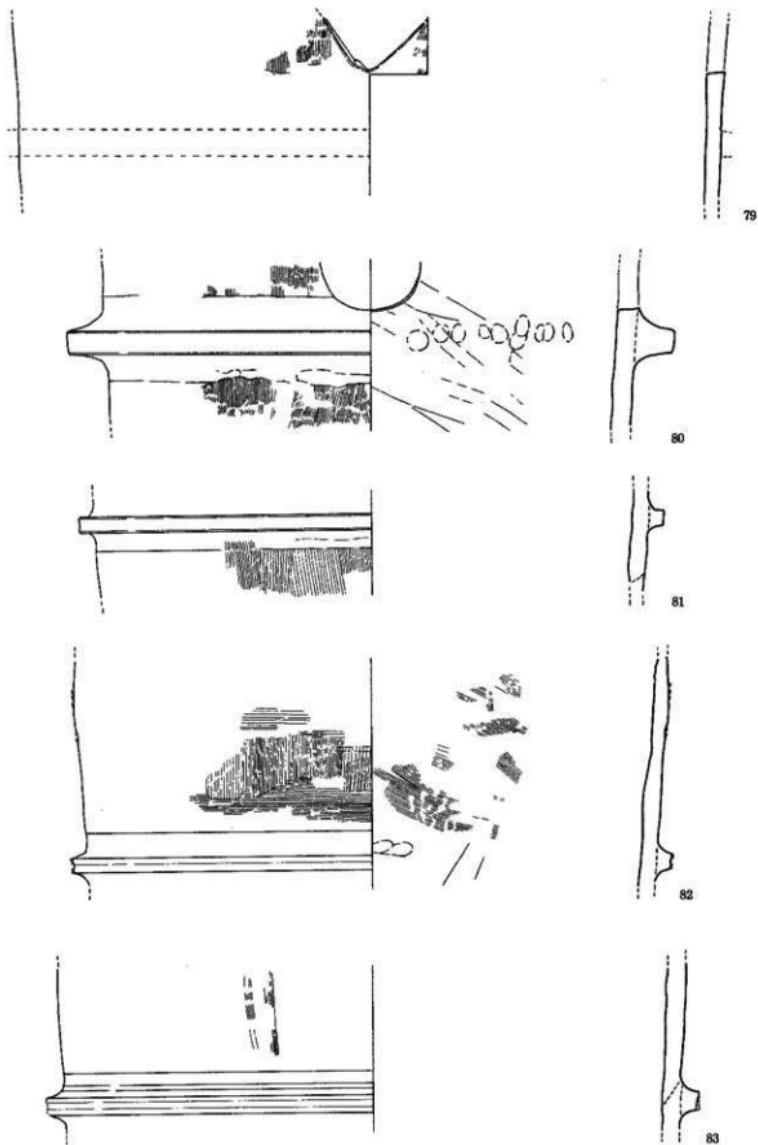


fig. 19 馬子塚古墳出土埴輪④ (S=1/3)



fig. 20 馬子塚古墳出土埴輪⑤ (S=1/3)

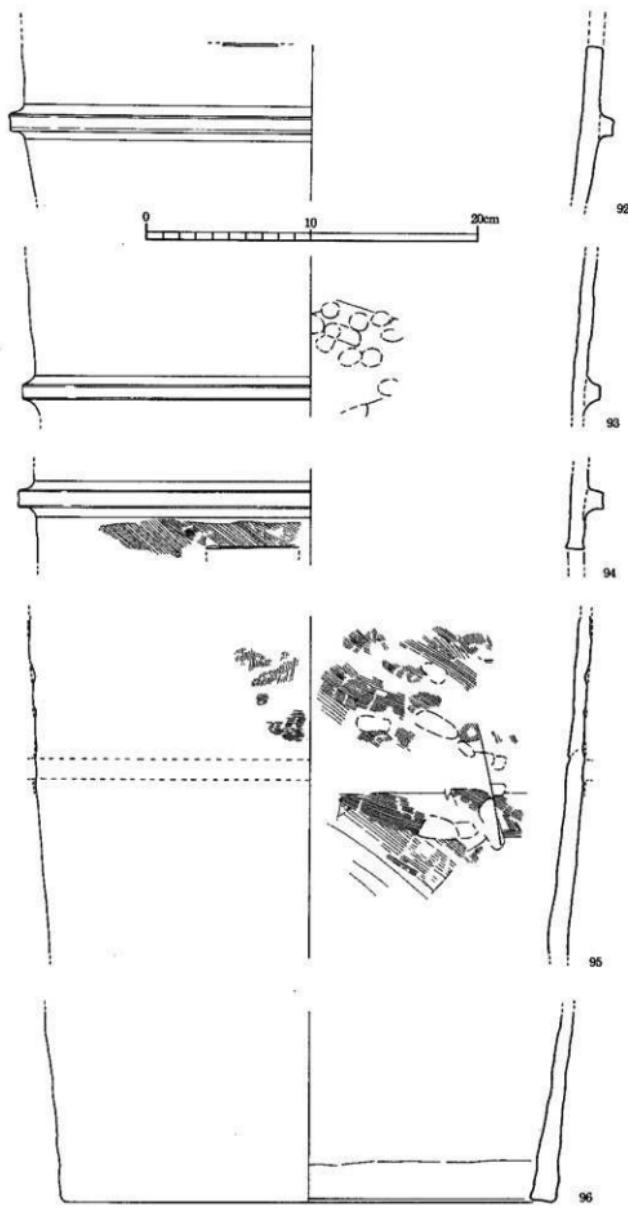


fig. 21 馬子塚古墳出土埴輪⑥ (S=1/3)

も荒い縦方向のハケを施している。朱の塗布はみられない。黄橙色を呈している。65も、調整や形態などから63と同一個体と考えられる。残存長7.7cm、同幅7cm、厚さ約1.1cmをはかる。線刻は片面のみである。一本の直線紋と三重の鋸歯紋が表現されている。調整は、両面とも荒い縦方向のハケを施している。朱の塗布はみられない。色調は黄橙色を呈している。66は衣蓋形埴輪の立ち飾りの一部であろうか。残存長14cm、同幅6.1cm、厚さ1cmをはかる。線刻は両面にみられる。四本の直線紋が表現されている。調整は、両面ともかなり摩滅しているためわからない。色調は淡赤黄色を呈している。

#### 円筒埴輪

67は口縁端部を欠失しているが、復元口径39.6cmをはかる大型の円筒埴輪である。タガは水平に突出し、端部は下方に垂れ下る。調整は、外面はタテハケの後一部ヨコハケ、内面はヨコハケを施す。口縁部及びタガ周辺は、ヨコナデ調整を施す。色調は乳灰色を呈し、焼成は良好である。68の口縁端部は外反し、端部は外側に折り返す。復元口径36.8cmをはかり、調整は内外面ともヨコハケ調整を施す。外面の一部には黒斑が遺存している。72は小片であるが、長方形のスカシを穿っている。調整は、外面がタテハケのみである。73は体部の破片で、調整は外面がタテハケ、内面はナデである。外面には朱が塗布されている。74は下部に長方形のスカシを穿つ。調整は、外面が斜め方向のハケ、内面はナデを施す。77も上部に長方形のスカシを穿っている。79はタガを欠失しているが、体部径を復元することができる。復元体部径は約42cmをはかる大型品である。上部には三角スカシを穿ち、調整は外面がタテハケ、内面はナデを施し、器壁は分厚い。80はタガが大きく、突出度が高い。復元体部径は32cm、タガの突出は約2.4cmをはかる。また、上部に径約6cmの円形スカシを穿っている。調整は外面が細かいタテハケ、内面はユビオサエの後ナデ、タガ周辺はヨコナデを施す。器壁は分厚い。形象埴輪の台部になる可能性があろう。82は復元体部径35.4cmをはかる。調整は、外面がタテハケの後ヨコハケ、内面は斜め方向のハケ後ナデを施している。外面には大きく黒斑が遺存している。84は底部からタガの最下段にかけての破片であるが、復元底部径は27.1cm、残存高29.4cmをはかる。底面からタガまでの高さは約19cmをはかる。調整は、外面がタテハケの後ヨコナデ、内面は斜め方向のハケの後ユビオサエ及びナデを施す。外面全体には黒斑が遺存している。85は体部の破片である。調整は、外面がタテハケ、内面はナデを施す。色調は乳灰色を呈する。86は体部の破片である。調整は、外面がタテハケ、内面は斜め方向のハケを施す。色調は赤茶色を呈している。90も体部の破片である。調整は、外面にタテハケを施し、下方には円形スカシを穿っている。95も体部の破片である。体部最大径は33cmをはかる。タガは外れている。調整は、外面がタテハケ後ヨコハケ、内面は斜め方向のハケ後ナデを施している。円筒埴輪は、細片になっているが、復元すれば大型品になるものが多い。摩湯山古墳出土の円筒埴輪と比較すると、焼成があまく、胎土も荒い感じをうける。器壁も分厚い。また、調整についてもタテハケの後ヨコハケを多用し、ハケ目の単位幅も広い。馬子塚古墳は、円筒埴輪だけをみても摩湯山古墳よりも後出的であろう。

(上林)

# 報告書抄録

ふりがな	まゆやまこふんはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	摩湯山古墳発掘調査報告書							
副書名	一般府道三林・岡山線歩道設置工事に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	1997-2							
編著者名	上林史郎、地村邦夫、西川寿勝							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課							
所在地	〒540-0008 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(941)0351							
発行年月日	西暦 1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ...	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因	
ま ゆ やま こふん 摩湯山古墳	きしわだし 岸和田市 ま ゆ やま こふん 摩湯町地内	27202	53	34° 27' 38"	135° 26' 08"	1997年8月1日 ～ 1998年3月31日	250m <sup>2</sup>	府道歩道 設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
摩湯山古墳	古墳	古墳時代・ 近世	周堤・井戸・水路		弥生土器・土師器・円筒埴輪・ 形象埴輪・鏡・管玉・近世瓦・ 近世土師器	• 摩湯山古墳の周堤斜面が検出された。 • 近世の水路や井戸が検出された。 • 未発表資料であつた馬子塚古墳の出土遺物を掲載した。		

# P L A T E

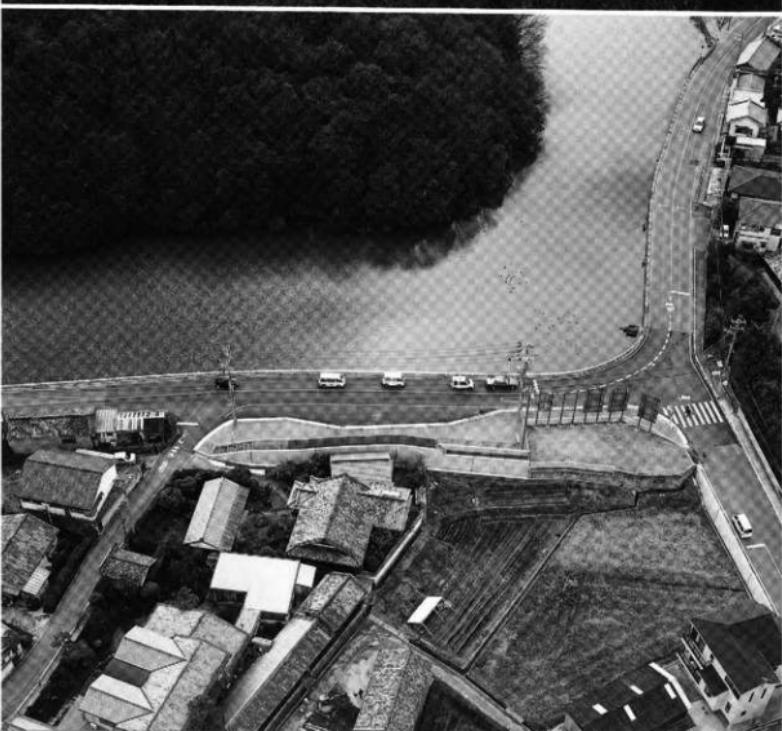


摩湯山古墳周辺垂直写真（左下が北）

P.L. 1  
摩湯山古墳と  
調査区



南西から



北東から



摩湯山古墳前方部  
(北東から)



調査区  
(北から)



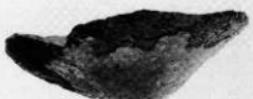
断面B  
(北西から)



断面A  
(北西から)



井戸  
(北から)

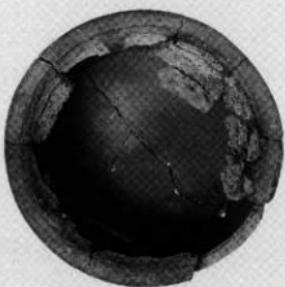


5

4



1



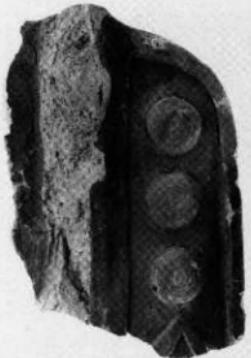
24

24



25

25



17



17側面



18



27



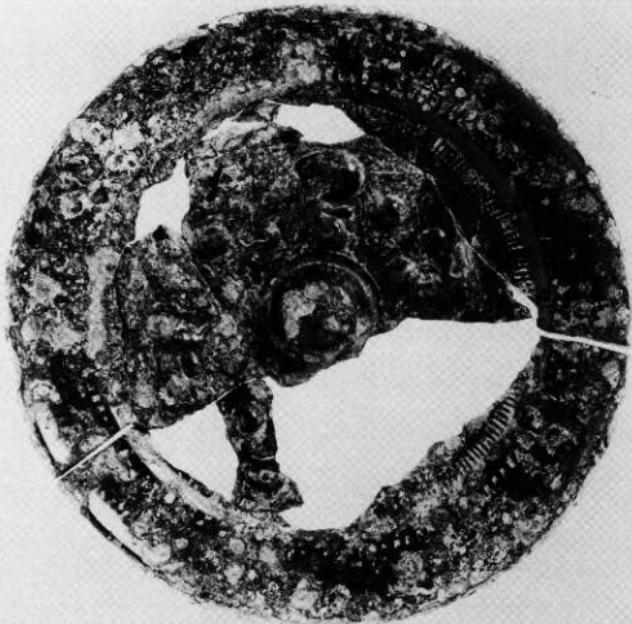
26



26側面



摩湯山古墳出土  
円筒埴輪



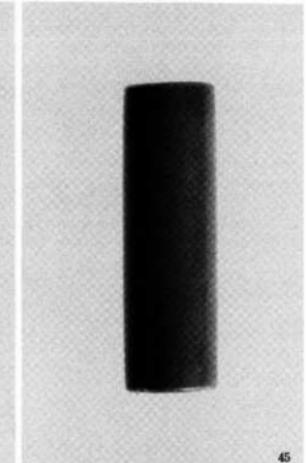
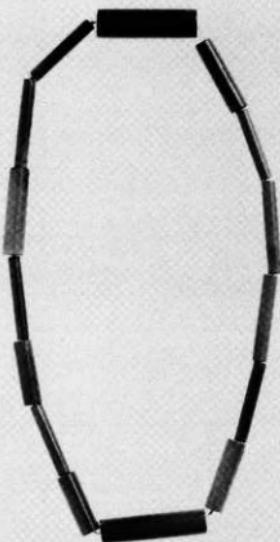
44



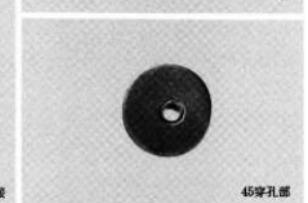
断面



馬子塚古墳出土  
斜線二神二獸鏡 東王父



45



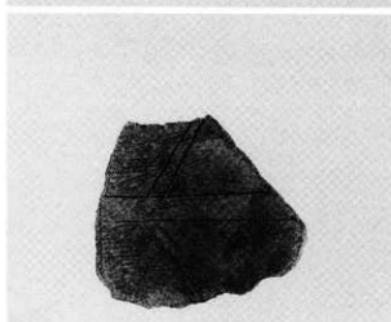
45穿孔部



61



61



62



62



80



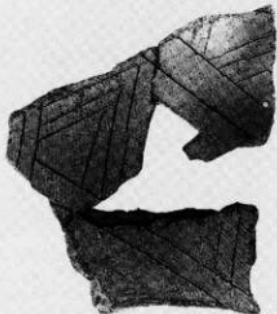
66



65



64



63



64

